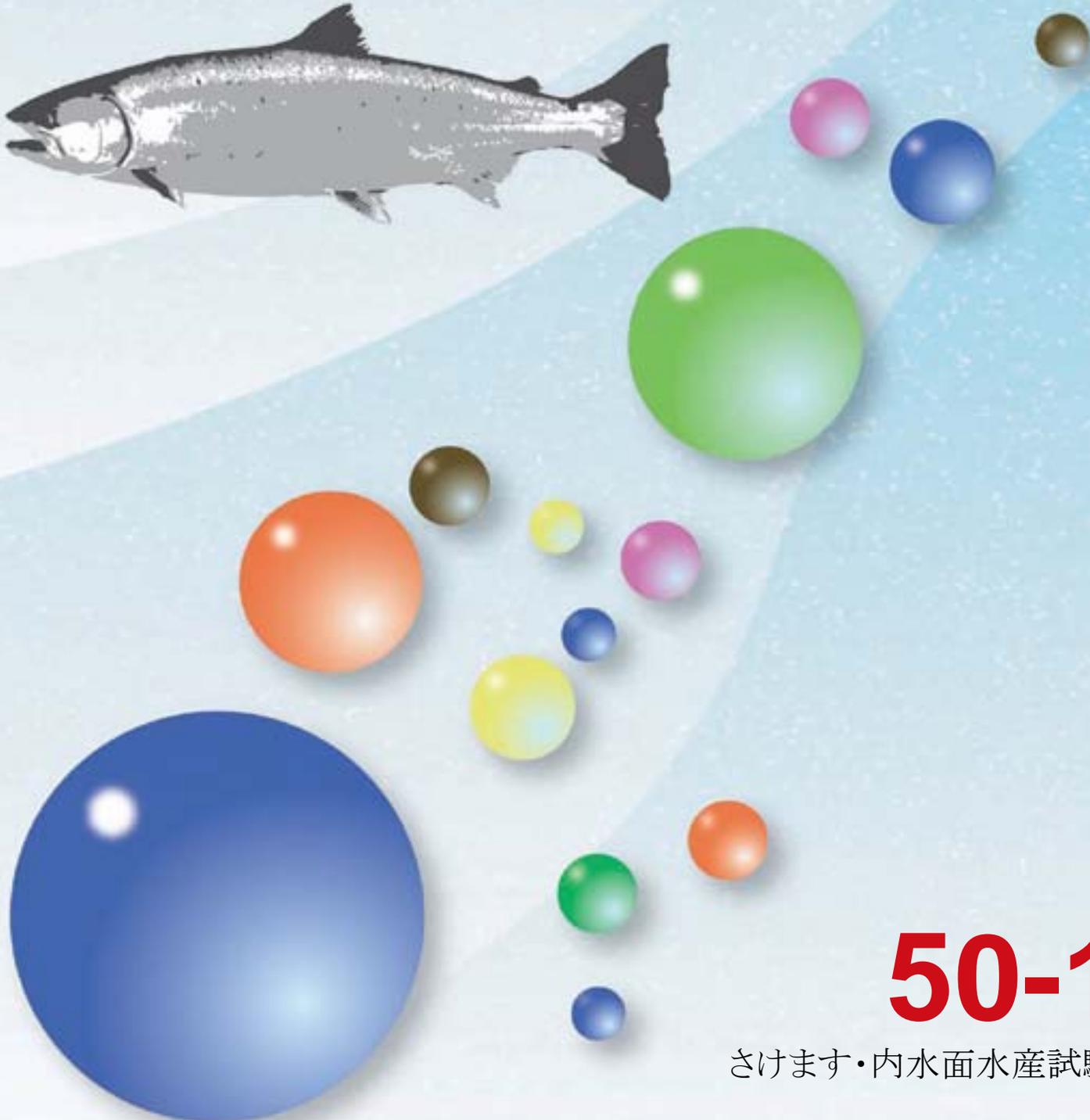
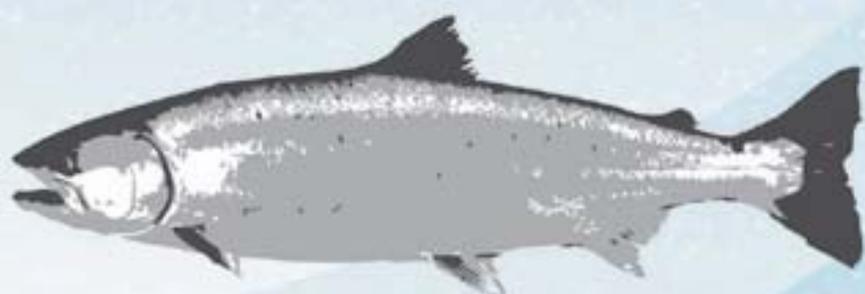


魚と水

Uo to Mizu



50-1

さけます・内水面水産試験場

目次

| | | |
|------------------------|-------------------------------|---|
| 「魚と水」と私 | ・・・・・・・・・・永田光博 | 1 |
| 就任に当たって | ・・・・・・・・・・樫林 守 | 3 |
| 自己紹介 | ・・・・・・・・・・久末哲也 | 4 |
| ご挨拶 | ・・・・・・・・・・前田満仁 | 4 |
| 平成 25 年度から開始される研究課題の紹介 | ・・・・・・・・・・ 竹内勝巳・宮腰靖之・佐々木義隆 | 5 |
| 釧路・十勝地区漁協女性部連絡会議視察研修 | ・・・・・・・・・・新井雅博 | 7 |
| 人事往来 | ・・・・・・・・・・魚と水編集委員 | 8 |

「魚と水」と私

永田 光博

魚と水が 50 号の刊行を迎えたとのこと大変うれしく思います。これも出版委員と先輩諸氏のご努力、そして読者の皆さまからの温かいご支援の賜物と深く感謝致します。

第 1 号が産声をあげたのが昭和 43 年 3 月、その編集後記に「当時は、昭和 42 年 4 月から、北海道さけますふ化場との併設を解かれ、本道内水面振興の中心機関として出発しました。これを機に、従来の“魚と卵”“内水面”の両広報誌を総合してより充実した豊富な広報誌として「魚と水」をお届けします」と書かれています（執筆者のイニシャルは K・H です）。昭和 27 年に北海道立水産孵化場として発足以来、当時は国からの委託を受けてさけます親魚捕獲事業を行っていました。しかし、この委託事業も昭和 41 年度で終止符が打たれ、内水面振興に力を注ぐこととなります。このことへの並々ならぬ決意が、この編集後記からも伺えるところです。しかし、実際には、さけます事業を手離した期間は短く、昭和 44 年度からはさけます資源の均てん化を図るため再びさけます増殖事業に関わることとなったのです。詳しくは、魚と水 41 号（記念号、平成 17 年）の「北海道立水産孵化場の歩み」（吉住喜好氏）をご覧くださいと思います。

「魚と水」に私が投稿した記事は必ずしも多くはありません。昭和 57 年に孵化場に入り、最初の赴任先であるえりも支場で書いた原稿「えりも支場におけるサケ稚魚の放流サイズの検討」（21 号、昭和 58 年）が最初です。この中でサケ稚魚海中飼育における開始時サイズとその後の成長パターン、そしてハナカジカによるサケ稚魚捕食サイズの検討を話題として紹介しています。えりもを含めた日高管内の定置漁業者は増殖事業に熱心だけでなく調査研究にも大変協力的でした。これは、えりも支場開場当初から現場主義を大事にされ増殖事業と調査研究を両立しながら業務にあたってこられた河村博氏（前場長）の影響が大きいと感じています。その河村氏から引き継いだ大事な研究課題であり、私のやる気だけは一応伝わってきます。

その後の原稿は 5 年後で坂本博幸氏との共著で書いた「サクラマス卵放流」（26 号、平成元年）です。千歳川の支流である漁川の上流で砂利を掘りながら悪戦苦闘した卵放流の方法を紹介しています。サクラマスの放流は稚魚や幼魚を車で輸送放流するのが普通でした。しかし、サクラマスが天然産卵する場所は上流や支流であり、

浮上した稚魚が下流に分散移動することで川全体の生産力を無駄なく使うことができると考えたわけです。そのためには車輸送が困難な上流や支流へコストをかけないで運ぶ方法を考案しないとイケない。その答えが卵での放流でした。ここでは遊漁者でも漁業者でも簡単にできる方法を紹介しました。この卵放流では思わぬ発見もありました。北海道では雄の半分程度が川で成熟し（早熟雄）、残りの雄だけがスマルト（銀毛幼魚）となって海に下ります。これに対して雌は全てスマルトになって海に下ります。人工産卵床から自然に浮上した稚魚の移動を調べてみると、川に残る傾向のある雄は産卵場所近くに留まり、海に下る雌は下流へ広く移動しました。この発見を Journal of Fish Biology というイギリスの雑誌に投稿したところ、わずか 10 日で受理されたのには驚きました。これも研究の楽しみの一つです。

次の原稿は「促成スマルトを用いたスマルト放流」（29 号、平成 4 年）で、森支場で 0+スマルト（通常は稚魚から 1 年経過しないとスマルト(1+)にならない）をなんとか漁業資源に結び付けたいという当時の支場長であった岡田鳳二氏（元場長）を始め職員皆の力の入りようが文章から伝わってきます。0+スマルトに耳石と鰭切除の 2 重標識を施し海水馴致してから渡島管内の港から放流しました。沿岸に回帰する冬から春に職員総出で市場調査を実施、朝に森を出発し南茅部、榎法華、恵山、函館市場を回って森に戻ってくると夜の 9 時、10 時といった感じでした。それでも、鰭標識のサクラマスを発見し、魚を買上げて支場に持ち帰り、頭から耳石を摘出し、蛍光顕微鏡下で標識マークを発見した時の満足感はとても大きなものでした。

その次の原稿は「サクラマスを増やすには」（34 号、平成 9 年）で、サクラマスフォーラム'96 の講演会で報告した内容です。この当時は、サクラマス資源の増大に當場職員が一丸となって頑張っていた印象が今でも強く残っています。実際、この時期は大量の調査研究が行われ、その結果を事業成績書だけではもったいないと感じていました。しかし、研究報告書となると書く人間に限られます。そこで、本来広報誌である魚と水にサクラマス特集として膨大な結果を取り上げました（31 号、平成 6 年；35 号、平成 10 年；40 号、平成 16 年）。

最近では、場長就任挨拶として書いた「さけます内水面と人と生き物とのかかわり」（48 号、平成 23 年）、香

港でのシーフードサミットへの講演招待を受けて執筆した「第10回国際シーフードサミット参加記」(49号、平成24年)といったところです。

広報誌ですが、個人の掲載記録を並べてみると、そこに自分が関わった増殖事業や調査研究の活動履歴を垣間見ることができ楽しいものです。これからも当場の色々な業務を分かり易く漁業関係者や道民へ伝える広報誌として役割をしっかりと担えるように職員みんなで話題づくりに励みたいと思います。

せっかく雑誌の話をしたので、平成7年5月13日に設立された「魚と水の会」についても簡単にご紹介いたします。この会は旧道立水産孵化場とさけます内水試を退

職されたOB、OGの集まりで、会長は岡田氏、そして幹事長は今田和史氏(元研究部長)が就任されています。毎年、5月に定例の総会があり、私を含めた現役幹部にも声がかかります。今年も5月11日(土)に札幌の中村屋旅館で開催され出席させていただきました(写真1)。来年は20周年の記念総会ということもあり、旧道立水産孵化場があった札幌市中の島を流れる精進川(改良されてとても川らしくなったとのこと)を見ながら、思い出深い懇親会(会長私案)等も検討していくとのこと。現役組も是非参加してみたいはいかがでしょうか。

(場長:ながた みつひろ)



写真1 中村屋旅館で開催された「魚と水の会」(撮影者:今田和史氏)

就任に当たって

榎林 守

この度、4月1日付けの人事異動によりまして、さけます・内水面水産試験場に勤務させていただくことになりました。苗字がめずらしく、初対面の方には正しく呼ばれたことがあまりありませんが、「かしばやし」と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

3月までは、道庁の財務会計事務を所管する出納局に勤務しておりました。昭和54年2月に北海道職員に採用されて以来、根室支庁会計課、出納局、東京事務所、総務部に勤務しましたが、一時期「情報公開」に係る部門などに配置されたものの、34年間のほとんどの期間を財務会計事務に従事してきました。このような経歴ですから、もちろん試験研究機関に勤務したこともありませんし、水産関係の業務に携わったこともありません。

しかし、これまでの道職員生活の中で唯一内部管理業務以外の業務に携わったことがあります。それは東京事務所で2年余りの期間でしたが、北海道の「観光と物産」の首都圏への売込み、情報発信をする業務でした。北海道の売りといえばもちろん、雄大な大自然とそこで生産される安心で安全な農林水産物です。

山手線の有楽町駅の間かいに東京交通会館という建物があり、その1階に道が設置する「北海道どさんこプラザ」という道産品を販売するアンテナショップがあります。そう広くはない面積ですが、年間8億円以上の売り上げがあります。

様々なジャンルの道産品が販売されているのですが、売上トップは残念ながら「菓子類」で全体の約30%です(平成24年度実績。以下同じ。)。やはりロイズの「ポテトチップチョコレート」や六花亭の「マルセイバターサンド」などの道産スイーツは根強い人気があります。ちなみに「白い恋人」は道内限定販売を徹底しており、フェアなどで期間限定で販売することはあっても、常時販売はしていません。

そして第2位は何と「水産加工品」で全体の約23%です。ちなみに農産物については、「畜産加工品」、「農産一次産品」、「農産加工品」、「乳製品」に区分して売上を計上しているのですが、これを合わせると約13%になります。

さて、「水産加工品」で売上トップ10は、金額では「①いか森っ子めし2P・②布目本数の子松前漬・③道東産さんま井・④黄金松前漬・⑤グルメ鮭とば・⑥一夜干し焼きいか・⑦北の味一番たこ・⑧紅太巻・⑨ネギトロ飯・⑩塩たらこ(切大)」、数量では「①道東産さんま井・②いか森っ子めし2P・③布目本数の子松前漬・④一夜干し焼きいか・⑤北の味一番たこ・⑥さんまのひつまぶし・⑦鮭とばスライス・⑧北の味一番にしん・⑨利尻とろろ昆布・⑩サーモン粕漬け」の順となっています。

東京をはじめとする首都圏、関西や九州など全国各地のデパートで開催される「北海道物産展」においても、水産加工品は中心的な販売品となっており、道産の水産加工品は全国どこでも大人気です。

このように全国各地で大人気の道産の水産物やその加工品について、試験研究機関でどのような研究が行われ、その成果がどのように活用されているかなどについては、現時点での乏しい知識では十分に分かりませんが、きっと研究職員の皆さんの長い年月にわたる地道な研究の成果が詰め込まれているのだと思います。

北海道に寄せられる食にかかわる期待の高さを感じた2年余りでしたが、北海道はその豊かな自然と環境を守り育てながら、安全で良質な食料を生産し、これを全国に提供していくことが求められているのだと思います。

この度、さけます・内水面試験場に異動になって、改めてその思いを強く持つことになり、直接にはありませんが、安全で良質な水産物生産に係る研究開発に少しでも寄与できればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(副場長 かしばやし まもる)

自己紹介

久末 哲也

この度の人事異動でさけます・内水面水産試験場の総務課に配属されました主査（総務）の久末哲也（ひさすえてつや）と申します。試験場は全く初めての職場で、分からないことばかりですが、皆様、どうぞよろしくお願ひします。

簡単に経歴を申しますと、前任は、水産林務部の総務課で、部の重点政策に関する局内の企画調整業務や、道庁内の他部との連絡調整、いわゆる部の窓口業務などを担当しておりました。また、その前の水産経営課では、コンブや秋サケの漁家経営調査などにも関わり、かなり昔のことになりますが、漁業管理課にも勤務したことがあります。

振興局（当時は支庁でしたが）では、渡島、胆振、日

高、留萌の水産課に勤務して参りました。

もう20年も前のことになりますが、漁業管理課で漁業権の担当をしている頃、ちょうど共同・区画漁業権と定置漁業権の一斉切替の時期と重なったことから、内水面の漁業権の設定にあたって、水産孵化場の方々に道内の湖沼に関する詳しい情報を教えていただき、大変お世話になったことを覚えております。

総務課は各部の業務を支えることが大きな仕事です。これから、いろいろとご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、皆様方のご協力をいただきながら、各部の業務をサポートしていきたいと考えておりますので、あらためてよろしくお願ひします。

（総務課 主査（総務） ひさすえ てつや）

ご挨拶

前田 満仁

4月の人事異動で、さけます・内水面水産試験場総務課主査（調整）に配属となりました、前田満仁（まえだみつひと）と申します。どうぞよろしくお願ひします。

前任は、千歳保健所健康推進課保健予防係というところにおりまして、主として感染症対策や難病患者支援等の仕事をしておりました。ノロウイルスによる集団感染や結核患者発生の対応などを行っており、昨年は、白菜切り漬けによる0-157の食中毒事件で大変忙しい思いをしました。今般、鳥インフルエンザが中国で確認されたことや風疹が流行しているとのことで、後任の担当の心配をしています。

水産関係の仕事は、ちょうど有珠山が噴火した1990年から道の水産林務部総務課の工事管理グループに3年間おり、入札契約のシステムに携わっておりました。

水産関係の仕事はその3年間ですので、ほとんど仕事の中身がわかっておりません。また、独立法人の財務会計システムもはじめてで、とても戸惑っております。

皆さんに迷惑をかけないよう努力したいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

（総務課 主査（調整） まえだ みつひと）

平成 25 年度から開始される研究課題の紹介

竹内勝巳・宮腰靖之・佐々木義隆

さけます・内水面水産試験場では今年度も新たに研究課題を立ち上げ、さけます類や内水面漁業対象魚種の資源管理と資源増殖に向けた試験研究に取り組みます。ここでは平成 25 年度から開始された研究課題（さけます資源部門 3 課題、内水面資源部門 4 課題）の概要を紹介します。

さけます資源部門

【経常研究：平成 25-29 年度】

遡上系種苗の導入と天然資源の回復によるサクラマス資源増殖研究

サクラマスの増殖研究として前年度まで実施してきた研究課題「サクラマス自然再生産資源の造成研究」では、放流および再生産環境の修復がサクラマスの自然再生産資源の造成に有効であることを明らかにしました。また、同じく昨年度まで実施した研究課題「遡上環境の復元によるさけます類の産卵環境回復量推定に関する研究」では、サクラマスが再生産する主要水系において潜在的な産卵環境回復量を推定しました。

本研究課題は大きく分けて 3 つの柱からなり、1) 民間のサクラマス増殖施設における遡上系サクラマスによる種苗生産体制の確立、2) 環境修復による天然サクラマス資源回復量の予測と個体群回復プロセスの研究、3) 天然魚と放流魚の生き残りおよび遺伝的特性の差異に関する研究を行います。これにより民間主体の遡上系種苗生産体制の確立と持続的な資源増殖・管理に必要な知見を収集することを目指します。

〔実施体制〕 さけます資源部・道南支場

【経常研究：平成 25-28 年度】

増殖事業現場におけるサケ稚魚の種苗性評価に関する研究

最近秋サケ来遊数に地域間の格差が大きく、資源の低迷する地区の関係者からは資源低迷の原因解明と対策に対する要望が寄せられています。サケの資源変動の原因について沿岸環境等の影響が研究されていますが、増殖現場での稚魚の種苗性評価は不十分で、放流稚魚の種苗性と来遊数の関係は評価されていません。そこで本研

究では、現場で容易に測定可能な種苗性評価手法を開発検討することを狙いとしています。

実際に、増殖事業現場で飼育されたサケ稚魚を用い、海水適応能、体色、血液性状などを測定し、それらの項目がサケ稚魚の種苗性評価基準として有効かどうかを検証します。本研究課題を通じ、新たな種苗性評価手法を提示したいと考えています。

〔実施体制〕 さけます資源部・内水面資源部・道南支場

【経常研究：平成 25-28 年度】

系統群が異なるサケ種苗の特性と適正放流サイズに関する研究

これまでのさけます・内水面水産試験場での研究課題において、サケの外部形態などを詳しく調べたところ、それらには河川間、海区間で系群ごとの特性があることが示唆されました。たとえば外部形態のうち、脊椎骨数は河川間で異なっており、系群を評価する上で一つの指標となることが確認されています。また、稚魚の成長、スモルト化時期（成長に伴う体色変化）、鱗の初期発生等にも地域差や前期群と後期群での差異があることも明らかとなりました。

これまでの結果から類推すると増殖海区ごとに稚魚の最適な放流サイズに違いがある可能性もあります。そこで、本研究課題ではさらに研究を進め、各増殖海区におけるサケ稚魚の放流種苗（前期群・後期群）の特性を把握、評価して、各地区での増殖技術の効率的向上に向けた検討を行います。

〔実施体制〕 さけます資源部・道南支場

内水面資源部門

【経常研究：平成 25-28 年度】

道央・道南域の湖沼における水産資源と生息環境のモニタリング調査

道央・道南域の湖沼では、支笏湖や倶多楽湖のヒメマス漁業と朱鞠内湖のイトウの遊漁については漁獲量や生息環境等の資料を蓄積してきました。一方、湖沼漁業が営まれている渡島大沼や朱鞠内湖のワカサギ資源につい

ては実施されていない状況にあります。本課題では、湖沼の漁業資源の維持のために、水産資源と生息環境のモニタリング調査を実施し、資料の蓄積を図ります。

また、各湖沼の現状に沿った水産資源の評価と環境要因による資源量への影響を判定するためにこれまでの成果を含めて解析して、モニタリング調査手法の効率化を検討します。

- 1 支笏湖： ヒメマスの資源評価のための、資源情報と生息環境の調査と解析。
- 2 倶多楽湖： ヒメマスの資源動向の把握のための、漁獲物情報と生息環境の調査と解析。
- 3 朱鞠内湖： ワカサギとイトウの遊漁に関する資料等と生息環境の調査と解析。
- 4 大沼： ワカサギの漁獲実態と生息環境に関する資料の調査と解析。

[実施体制：内水面資源部]

【経常研究：平成25-27年度】

さけます類の細菌性疾病における卵内感染の実態解明および防除方法の検討

さけます類の親魚が細菌性疾病に感染した場合、原因菌が卵内に侵入しその稚魚が感染を受ける現象があります(卵内感染)。これまで北海道内で卵内感染の実態を調査した事例はありませんが、細菌性腎臓病・冷水病は道内で発生が多い疾病となっていて、また、河川に遡上するさけます類からこれらの原因菌が検出されることがあることから、すでに主要な感染様式として頻発している可能性も考えられます。一方、ヨード剤による卵消毒は、卵内感染には無効であるため、卵内感染の新たな防除方法が必要となっています。

本研究課題では、道内の施設における細菌性腎臓病および冷水病の卵内感染の実態について明らかにするとともに、細菌性腎臓病については卵内感染を実験的に再現して、その感染成立条件から防除方法を開発します。

[実施体制：内水面資源部]

【受託研究：平成25年度】

ハーブを活用したサケ稚魚の原虫病予防技術開発に向けた基盤研究

北海道内のふ化場では稚魚にイクチオボド症など原虫病(寄生虫病)が頻繁に発生し、飼育稚魚の健康度と放流後の生残率を低下させています。また、道内のさけます類に寄生するイクチオボドの分類は確定しておらず、

イクチオボド症を含む原虫病の発生機構は不明なままとなっています。このため、原虫病対策は発症後の治療のみに依存していて、予防技術は未開発のままです。

さらに、道内における原虫病の発生状況は薬事法改正以降、正確に把握されたことはありません。これらの課題を総合的に解決するためには、イクチオボド症をはじめとする原虫病の予防技術を開発して、本技術を原虫病の発生しているふ化場へ適切に普及させることが必要です。

本研究課題では、サケ稚魚の原虫病予防技術の開発と普及のために、その基盤となる知見を得ることを目的として、ハーブを活用した原虫病予防技術の検索、イクチオボドの分類と発生源検索、道内各地の原虫病の実態解明を行います。

[実施体制：内水面資源部・道東支場]

【受託研究：平成25-29年度】

北海道資源生態調査総合事業調査 — 鶴川シシャモ遡上量調査 —

えりも以西太平洋海域におけるシシャモ資源の維持増大と漁家の経営安定のため、早い時期からの資源予測と適正な遡上親魚量確保の方策など、精度の高い資源管理方法の技術開発が漁業者から求められています。シシャモ資源の自主的管理として、漁業者は鶴川におけるシシャモ親魚遡上数(60万尾)を目途として終漁するようになりました。しかし、遡上数とその子世代年級群の関係にアンバランスな年級群も確認されるため、遡上数推定精度を向上させるとともに、将来的には、計量魚探システム導入などによる省力化を図る必要があります。

本研究課題では、鶴川における毎年のシシャモ親魚遡上尾数をモニタリングして、資源管理方策検討のための基礎資料とします。また、遡上尾数の推定精度の向上や調査手法の効率化を検討します。

[実施体制：内水面資源部]

以上のように、新規性の高い研究課題、これまでの研究をさらに発展させる研究課題、さけます資源部門と内水面資源部門の両部門が連携して実施する研究課題などが今年の新規課題の特徴となっています。これらの研究課題を精力的に進めて、関係分野に貢献できる研究成果を挙げたいと考えています。

(内水面資源部 たけうちかつみ)

(さけます資源部 みやこしやすゆき・ささきよしたか)

釧路・十勝地区漁協女性部連絡会議視察研修

新井 雅博

平成 25 年 2 月 26 日（火）10 時～11 時、釧路・十勝地区漁協女性部連絡協議会の方々11 名が、さけます・内水面水産試験場を来訪されました。はじめに、さけます資源部さけます研究グループ佐々木主幹が「近年における

サケ漁獲量の推移やサケの生態等」について、講義を行いました。講義終了後は、試験場内の見学を行いました。
（総務部 主査（連携） あらい まさひろ）



写真1 近年のサケ漁獲量の推移等について
講義する佐々木研究主幹



写真2 場内 1F 研究棟内を視察見学する
漁協女性部長の方々

人事往来

平成25年3月31日付

| | | | |
|----|------|---|---------------------------------------|
| 退職 | 伊藤俊昭 | 前 | さけます・内水面水産試験場副場長 |
| 退職 | 北田憲行 | 前 | さけます・内水面水産試験場総務部長 |
| 退職 | 坂本博幸 | 前 | さけます・内水面水産試験場内水面資源部 内水面研究グループ主任研究員 |

平成25年4月1日付

| | | | |
|---|-------|---|--|
| 法人本部経営企画部財務グループ副主幹兼主査 | 遠藤龍彦 | 前 | さけます・内水面水産試験場総務部総務課 副主幹兼主査（調整） |
| 水産研究本部企画調整部企画課企画グループ主査 | 楠田 聡 | 前 | さけます・内水面水産試験場道南支場主査（資源） |
| さけます・内水面水産試験場副場長 | 榎林 守 | 前 | 出納局総務課長 |
| さけます・内水面水産試験場総務課長 | 池田一樹 | 前 | さけます内水面水産試験場総務部総務課 主査（総務） |
| さけます・内水面水産試験場総務課主査（総務） | 久末哲也 | 前 | 水産林務部総務課主査 |
| さけます・内水面水産試験場総務課主査（調整） | 前田満仁 | 前 | 石狩振興局保健環境部千歳地域保健室 健康推進課予防係長 |
| さけます・内水面水産試験場さけます資源部 さけます研究グループ研究主幹兼主査（資源保全） | 佐々木義隆 | 前 | さけます・内水面水産試験場さけます資源部 さけます研究グループ研究主幹 |
| さけます・内水面水産試験場さけます資源部 さけます研究グループ研究主任 | 飯嶋亜内 | 前 | さけます・内水面水産試験場道南支場研究主任 |
| さけます・内水面水産試験場内水面資源部 主任研究員 | 工藤 智 | 前 | さけます・内水面水産試験場内水面資源部 内水面研究グループ主査（河川湖沼） |
| さけます・内水面水産試験場内水面資源部 内水面研究グループ主査（河川湖沼） | 内藤一明 | 前 | さけます・内水面水産試験場内水面資源部 内水面研究グループ主査（養殖技術） |
| さけます・内水面水産試験場内水面資源部 内水面研究グループ主査（養殖技術） | 三坂尚行 | 前 | 水産研究本部企画調整部企画課企画グループ 主査 |
| さけます・内水面水産試験場道南支場主任研究員 | 青山智哉 | 前 | さけます・内水面水産試験場さけます資源部 さけます研究グループ主任研究員 |
| さけます・内水面水産試験場道南支場主査（資源） | 神力義仁 | 前 | さけます・内水面水産試験場さけます資源部 主査（資源保全） |
| さけます・内水面水産試験場さけます資源部 専門研究員 | 川村洋司 | 前 | さけます・内水面水産試験場さけます資源部 研究職員 |
| さけます・内水面水産試験場内水面資源部 専門研究員 | 寺西哲夫 | 前 | さけます・内水面水産試験場内水面資源部 研究職員 |

平成 25 年 6 月 1 日 発行

発行 地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
さけます・内水面水産試験場
場長 永田 光博

編集 さけます・内水面水産試験場 出版委員会
恵庭市北柏木町 3 丁目 373
(電話 0123-32-2135)